大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

朱熹集版本考略

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 郭, 斉, 尹, 波, 大平, 桂一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011246

朱熹集版本考略

四川大学古籍所　郭齊　尹波
大平桂一訳

第一章　朱熹在世中の文集出版状況

朱熹の在生中に、すでに彼の文集で印刷に付されたものがあった。『文集』巻六十三「胡伯量に答える」一、巻末の『考異補遺』に別本が存在したことが記されている。胡永の質問に言う、「麻沙が印刻した先生の文集に陸教授への返書が入っており、その大意は次のとおりです。吉凶の礼は、変化はゆっくりとした段階的なものです。先王が礼を制定した際には、人間の感情に基づいており、卒哭して廟に併せまつってからは、徐々に神としてそれにお仕えするようになります。主人が寝に復しても完全に死者に仕える礼でお仕えするに忍びないのです、云々。文集で先生がおっしゃっている内容は、人格者・孝子の感情を深く理解してのことと存じます、云々。文集で先王の礼の制定に言及しておられるのは、朝夕に哭するようになっても、生きている人にお仕えするような気持ちをこめる、とお考えになってのことなのでしょう、云々。」『文集』巻六十九の「君臣服議」、巻四十六「答黄商伯」二、『続集』巻一「答黄直卿」五十三、及び『朱子語類』の「語録姓氏」から総合的に判断すると、「胡伯量に答える」は慶元年間に書かれたと考えられる。この書簡で言う麻沙版の朱熹文集については、その詳しい内容はわからないものの、すでに朱熹の生前にその文集を結集し刊行した人がいたということは確信できる。

現存する最も早い宋刊本の朱熹の文集は、台湾故宮博物院蔵の『晦庵先生文集』前集十一巻、後集十八巻であ

る。この本は大字本で、半頁十二行、一行二十一字からなっている。白口で、時折黒口もみられ、双魚尾である。後集は『論語』為政篇の初めの言葉、「為」「政」「徳」「譬」「如」「北」「辰」「居」「其」「所」「而」「又拱」「定譬」「衆」「星」「拱」「之」などの字で巻の順序を記しており、このような例は稀である。

記載によると、この本はもとは毛晋の汲古閣の旧蔵本で、「毛晋」「汲古主人」という二つの印がある。後に宮廷に入り、昭仁殿に収蔵され、「乾隆御覧之宝」「五福五代堂宝」「八徵耄念之宝」「太上皇帝之宝」「天禄琳琅」などの印があって、『天禄琳琅書目』後編巻七に著録されている。民国十一年八月十七日、溥儀が溥傑に下賜し、外部に流伝した。この書物は『賞溥傑書画目』にはいっている。抗日戦争の初期に沈仲濤が上海で購入し、私蔵愛玩すること数十年、晩年になって台湾の故宮博物院に寄贈したのであった。

この書物の流伝にはきちんとした来歴がある。版刻の状況を細かく観察し、現存する宋代閩・浙二本の『文集』及び多くの宋代の文献と比較校勘すると、この本が宋刊本であることは疑いない。例をあげると、この本の字句は宋の閩本と同じものもあれば宋代の浙刻本に合致するものもある。また二本と違っていてしかもすぐれている場合もある。前集巻六「答建昌顔君子堅書」の全体を現行の文集と比較すると数十語多く、『播芳大全』に載っているものと寸分たがわない。後集巻十三「皇極弁」と今本『文集』の字句は異同があるが、『性理群書句解』巻八の「十先生奥論注後集」とまったく同じである。後集巻十七「少傅劉公神道碑」と今本『文集』のそれとは非常に異なっているにもかかわらず、『劉氏伝忠録』巻二がのせているものとすべて合致している。もしも宋代の刊本でないのならば、絶対に以上述べたようなことはありえず、本物であることは疑いない。

この本には序跋がついておらず、だれが編纂したのか、いつ刊行されたのかよくわからない。文中の避諱と文章収録のようすからみると刊刻の年代の確定はむずかしくない。この本の前集は「慎」の字までを諱み、所収の

詩文の中では淳熙十六年春に作った「水調歌頭」「次袁機仲韻」がもっともおそいので、孝宗淳熙十六年の版にちがいない。後集は「敦」まで諱んでおり、所収の詩文の中では淳熙十六年二月作の「大学章句序」がもっともおそいようである。にもかかわらず、その年の三月朱熹が書いた「中庸章句序」は収められていない。だから淳熙十六年二月の光宗即位以後に刊刻されたか、ひょっとしたら紹熙年間の初めあたりまで刊刻の時期が遅くなるかもしれない。また前集の印刷をよく見るとすでにぼんやりしてきており、補修されたり、取り替えられた頁もある。後集は印刷ははっきりしているけれども改刻したところもあり、最初の刊刻はもっとはやかったかもしれず、収められている遅い時期の文章は後になってから補われたのかもしれない。要約すると、この前集・後集は淳熙年間の刊本であると考えてそれほどまちがいないようである。

この『晦庵先生文集』の編集は前後むちゃくちゃで、絶対に朱熹自身が編集したものではない。昌彼得はこの文集が手に入れた詩文を次々に印刻していることから、閩中の坊刻本であるとしているが、その通りであろう。前集巻六にはいっている「答陸子壽書」が、今の文集巻六十三で胡泳が言っている「復陸教授書」であることから、淳熙本が「麻沙が印刻した」本にあたるかもしれない。

淳熙本は現存する最古の朱熹文集の版本であり、その価値ははかりしれない。現存する宋代の閩本浙本と比較すると、四篇が多くなっているし、内容も数千字増補され、現行本の若干のまちがいを訂正することができる。所収の詩文集、たとえば「明筮占」「皇極弁」「雲谷記」「少傅劉公神道碑」など現行本とは文字の異同がかなりあって重要な参考価値を持つ。

慶元四年、朱熹の門人王峴が朱熹の文集を廬陵で印刻させてくれと要請した。『文集』巻五十三「答劉季章」第八書には「王晋輔が来て、父上の銘文を求めてきました、云々。彼はまた拙文を編集して出版したいといって

います、この事は必ずや実現するとは限りませんが、このような要請の声はあってはならんのです。彼は若輩で経験不足、時勢を理解しておらず、出版が大いなる禍いをもたらすきっかけになったり、文章が出鱈目に収録されることにもなることを知らないのです、云々。文章を石に刻すこと、版刻することといった事業はともかく絶対にやめてもらいたいです。」とあり、第十七書にも「近ごろ益公の書を得て、晋輔の家に滞在しているとのこと、大いにけっこう、云々。文集を出版しようとする提議はやめるべきです。あちらにとっては無益なくわだて、こちらにとっては不利益です。わたしも年で病気がちの身、どうして広南などに行けましょうや、とにかくやめて下さい。」晋輔の要請した出版は実現に至ったのだろうか。『文集』巻六十二「答王晋輔書」第三書に、「おっしゃっていた拙文について、あまりにもこみいったことになっていませんか。劉季章にことづけたように、拙文の出版はどちらにとっても禍いをもたらすだけではすみません。」巻二十九「答劉季章書」に「晋輔のところに集まっていると聞いてよろこんでいます。心身をととのえ、内側にむかって努力すべきで、外に向かって心を消耗してはならないと諭してやって下さい。無益であるだけでなく、この御時勢、またどんなひどい目に会うかもしれません。以前の石刻と現在刊行しようとしている三冊は早く隠して、印刷してはいけません。将来またこんなくわだてがあったらきっとやめさせて下さい。」とある。この二つの書簡を見ると、王峴はおそらく『文集』の版木を彫っていたらしい。もしそうだとすると、これが慶元年間の廬陵本である。

以上述べたことから、朱熹の生前にすでにその文集が刊行されており、それも一種類にとどまらなかったことがわかる。しかしこれらは実際には詩文の選集であり、現在まで伝わってきているのは淳熙年間刊行の前後集二十九巻だけである。

第二章　朱熹の死後における全集の編纂

朱熹がなくなった後の全集の編纂は彼の末子朱在に始まる。

洪去蕪『朱子年譜』によると、朱熹がなくなる一日前に、「皆が退出すると、先生は三通の書簡を書き、一通を子の在に与え、早く帰って遺文を収集整理せよと命じた。」黄榦が書いた朱熹の行状には次のように言っている、「生前の著作は末子の在が編集している。」おそくとも「朱子行状」が完成した時（嘉定十年夏、『勉斎集』巻七「行状成告家廟文」に見える）には、朱熹文集は朱在によって編集されていたことがわかる。「生前の著作」と言っているからには、まちがいなく朱熹の詩文の全集であったであろう。清の朱玉「朱子文集大全類編跋」も「文祖の臨終の時に末子に早く帰って作品をあつめるように命じていることに感嘆の念を禁じ得ない。著作がかなり多く、断簡零墨に至るまで集めようとしていたことが見て取れる。」といっている。『勉斎集』巻六「復胡伯量」も次のように言う、「私はたまたまある職についており、その仕事をおろそかにできず、なんとか編纂の仕事をやっていました。そうでなければ、妻子を養うだけのために俸給をもらって便便とくらせましょうや、云々。いわゆる座右銘四句は先師の『文集』にありますか？」『黄榦年譜』によると、朱熹がなくなった後、黄榦は嘉定三年の冬初めて官職についた。その後何度も任官と免職をくりかえし、嘉定十一年冬に初めて食禄をもらい致仕し、なくなるまで官職につかなかった。この書簡で言及している『朱熹文集』は、当時彼が官職にあったことからすると、おそくとも嘉定十年には完成していたはずである。朱在が編集した本の巻数はどの目録にも記録がなく、明成化十九年黄仲昭「晦庵先生文集跋」が初めて「『晦庵朱先生文集』百巻、閩浙のどちらにも旧刻本がある、云々。今閩藩に残っている本は、先生の末子在が編集したものである。」といい、朱在の本は百巻となっているようである。しかし朱熹十六世の子孫朱玉が書いた「朱子文集大全類編」は朱在本は八十八巻だったと言

っており、二十二世の子孫朱振鐸が書いた「朱子集版復蔵紫霞洲祀堂叙」も「文公の『文集』原本は八十八巻、末子の侍郎公が自ら編集したのである。」と言っているが、どんな根拠があるのかわからない。明万暦三十三年朱崇沐が刊刻した『晦庵先生朱文公文集』は八十八巻で、朱玉・朱振鐸の説と符合するかのように見えるが、『正集』百巻から奏議を抜き出して『文公奏議』を単独で刊刻しており、しかも朱在の編集した原本が八十八巻だったとはまったく言っておらず、証拠とするにたらない。

朱在本と前後して、黄士毅が朱熹文集百五十巻を編集した。『鶴山先生大全集』巻五十三「朱文公語類序」に言う、「子洪、名は士毅、姑蘇の人。以前文公の文集百五十巻を分類編集した。今は宮中図書館に所蔵されている。」『宋元学案』巻六十九「黄士毅伝」にもこうある、「黄士毅、字は子洪、号は壺山、莆田の人、云々。著述はとても豊富で、『儀礼』を分類注釈し、文公の『書説』七巻、『文集』百五十巻を編集整理し、また語録や議論を分類配列して『語類』百三十八巻をつくった。」魏了翁の序文は嘉定十三年に書かれ、黄士毅の『朱子語類』は嘉定十二年（このことは黄士毅の「朱子語類後序」にみえる）に成立しているので、黄本の文集はその前に成立したこととなる。魏了翁の序文が「文公の文集を分類編集した」と言っているからには、その体例は『朱子語類』によく似ていたにちがいなく、朱熹の詩文を部門別に編集したので巻数は百五十巻にも達したのである。

理宗の嘉熙三年に、王野が建安書院で朱熹の文集百巻を刊刻した。趙希弁の『郡斎読書志付志』は『晦庵先生文集』百巻を著録し、次のように言っている、「嘉熙己亥の年に、王野が建安で刻し、黄壮猷がその事業をついで完成し、後ろに識語を書いた。」淳祐五年王遂が書いた「文公続集序」には言う、「癸卯の年、私は建安の仮知事となり、門人弟子で残っている人から議論の精粋を求めたが、それはすでに王潜斎が出版していたのであった。」咸淳元年に黄鏞は「文公別集序」を書きこう言っている、「文公先生の文業のうち、『正集』、『続集』は、潜斎と

実斎のお二人がすでに書院で版刻した。」潜斎とはすなわち王野で、字は子文、婺州金華の人である。真徳秀はかつて彼のために「潜斎記」を書いたし、『宋史』巻四百二十に伝があり、『宋元学案』巻八十一は「簽枢王潜斎先生野」と題されている。

王野刊本は現時点で宋人の著録した最も早い百巻本の朱熹文集である。しかし、各家の記載には版刻したとだけいっており、この本は王野が編集したのではないかもしれない。最初の百巻本朱熹文集は結局だれによって編集されたのかは確定する手だてがない。王野刊本とあい前後する『直斎書録解題』には『晦庵集』百巻付録『紫陽年譜』三巻が著録されているが、編者の名前がない。しかしおそくとも理宗の嘉熙年間には、朱熹文集は最終的に百巻の形となり、歴代それを踏襲して、今に至るまで変化していない、このことは確実にいえると思う。しかし以上は文献にはっきりした記載があるものについていったまでであって、実際には百巻本文集の編集はもっと早いのである。現存する宋版残欠の閩本浙本が諱んでいる最も遅い文字は「擴」で、早くも寧宗の時に百巻本がすでに刊行されていたことを物語っている。

第三章　閩本と浙本

百巻本朱熹文集が世に出てから、翻刻と訂補を経てだんだんと閩本浙本の二つの系統が形成されて行き、歴代の版本目録学者たちはそれぞれ閩本浙本と呼ぶようになった。最も早く二本を区別したのは、明の成化十九年黄仲昭が書いた「書成化補修本晦庵朱先生文集後」であって、そこにはこうある。「右『晦庵朱先生文集』百巻は昔閩浙両地方で出版された。浙本は洪武年間の初めに南京国士監に置かれたが、編集がだれの手によるのかわからない。今閩藩に残されている本は、先生の末子在が編集したものである、云々。成化戊子に私は翰林院から南

京に左遷された時、たまたま閩本を手にいれ、公務の余暇に浙本と比較校勘してみたが、二本の間には詳略に差がある。」閩浙の二本はこれまで深く研究されたことがなく、学説にも誤りが多い。現行の二本によって考察してみよう。

一、二本の主な違い。二本の主な違いは、①名称が閩本は『晦庵先生朱文公集』、浙本は『晦庵先生文集』となっている。②閩本は半頁が十行十八字、浙本は十行十九字。③閩本の多くは『続集』、『別集』とともに同時に刊行されているのに対し、浙本は『続集』、『別集』を含んだものがない。たとえば『皕宋楼蔵書志』巻八十五に著録されている、旧張楊園所蔵で現日本静嘉堂文庫の蔵本、そして北京大学図書館蔵本の、宋に刊刻され元明に補修された『晦庵先生朱文公集』百巻、『続集』十一巻、『別集』十巻は半頁が十行十八字で閩本である。『直斎書録解題』に著録されている『晦庵集』百巻、『群斎読書志付志』に著録されている『晦庵先生文集』百巻は浙本と考えられる。王文晋の『文録堂訪書記』巻四に著録されている『晦庵先生文集』百巻、及び『鉄琴銅剣楼蔵書目録』に著録されており、今は北京図書館蔵となっている『晦庵先生文集』百巻は、半頁十行十九字であってやはり浙本である。④閩本は歴代の通行本となったのに対し、浙本は宋刊本があるだけである。明代の天順本、嘉靖本、万暦本、清代の康熙本、雍正本、乾隆年間の『四庫全書』本、道光本そして様々な叢書所収本はすべて閩本から来ており、元明以後浙本には重刊されたものがない。⑤内容についても、閩本と浙本には詳略の違い、編集の順番の違い、文字の異同が存在する。一般的にいって閩本は省略が多く、浙本はみな詳細である。最もそれがはっきり現われているのは、巻十八、十九の唐仲友を弾劾した数章と、書簡の中でも問答の質問の部分であり、閩本がたいていの場合かなり大規模に省略しているのに対し、浙本は例外なく詳細に原文を掲載している。編集上では、歴代の版本目録学者がすでに続々と数多くの差異を指摘している。たとえば、「奉題張敬夫春風楼」

詩を閩本は巻五の「蓮花峰次敬夫韻」の次に置き、浙本は「敬簡堂分韻得月字」の後に置いている。「水調歌頭聯句問訊羅漢」詞は閩本は巻十に、浙本は巻五に置いている。「書濂溪光風霽月亭」「游密庵記」は閩本では巻八十四にあり、浙本では巻七十九にある。「皇考吏部府君遷墓記」は閩本では巻九十四「祝氏壙志」の前にあり、浙本ではその後にある。二本の編集の差異はこれにとどまらない。さらに数条をあげておこう。「与陳丞相別紙」は閩本では巻二十六にあり浙本では巻三十七にある。「答尤延之」は閩本では巻二十七、浙本では巻二十九にある。「井田類説」は閩本では巻六十八の巻末に置かれ、浙本では巻首に置かれている。「濂溪先生事実記」は閩本では巻九十八に、浙本では巻七十八にある。「伊川先生年譜」は閩本では巻九十八に、浙本では巻七十一にある。「劉子和伝」は閩本では巻九十八、浙本では巻九十にある。「朱松行状」は閩本では巻九十七、浙本では巻九十八にある。また巻九十七の文章の順序が閩・浙二本で異なっている等々である。文字の異同は二本の間でかなりな数に上り、表題だけ見ても往々にして互いに異なっている。というわけで、閩浙二本の差はかなりはっきりしており、ある学者が言うような、「(二本の差異は)字句の違いに過ぎず、編集の順序や巻数についてはまったく同一である」(王重民『中国善本叢書提要』)ということではない。閩本浙本という二つの系統は客観的に存在する。

二、二本の淵源関係について。閩浙二本の間にはあきらかな差異があるが、同一の部分のほうがさらに多い。二本の篇目は完全に同じである。巻末に付載されている『考異』は大多数が一字として違っていない。編集の順序も大多数は完全に一致している。さらに注目に値するのは、二本が文字について誤っているところは両方誤っており、欠けているところは両方とも欠けている点である。たとえば閩本巻八「五禽言和王仲衡尚書」第二行「只今」の下に一字欠けている。巻九「挽蔡□□太傅」で二字欠けている。巻十「次韻芮察院送□宝文赴浙漕二首」で一字欠けている。巻三「秋香径」の「千林」の下に二字欠けている。「又次秀野極目亭韻」の「孤燈閑」

の上下に各々二字欠けている。「次山行佳句呈秀野丈三首」の「向来」の上に二字欠けており、「嘆」の下に四字欠けている。巻四「答王無功在京思故園見郷人問」の「隨堤」の下に一字欠けている。「奉答景仁老兄贈別之句」の「今已」の下に一字欠け、「読通鑑紀事本末用武夷唱和元韻寄機仲」の「言未秉」の上に一字欠けている。これらの諸点は浙本も完全に同じである。というわけで我々は閩・浙二本が緊密な淵源関係をもっているだけではなく、もともと同一のテキストから発していると十分に信ずるに足る理由を持ったわけである。二本の差異は互いに翻刻修訂している間に生まれたものである。

三、二本の相互の伝承。それならば閩浙二本のうちどちらが先でどちらが後なのだろうか。今見ることのできる宋代の残本からはこの問題に答えるのはむずかしい。なぜならば二本には互いに訂正しあった形跡が見られるからである。まず浙本が閩本を訂正した例をみてみよう。巻五「奉題張敬夫春風楼」詩を閩本は南岳唱酬の諸作品の中に於いているが妥当ではない。浙本はこの詩を「敬簡堂分韻得月字」の後に移しているが、それではじめて合理的な排列となる。閩本巻八十四「書濂渓光風霽月亭」「游密庵記」二篇は本来は游記なのに序跋類に置かれているのは特におかしい。浙本が巻七十九の「記」類に移動させたのが正しい。閩本巻九十四「皇考吏部府君遷墓記」は順序がおかしくなっているのを浙本は「祝氏壙志」の後に移しており、そうしてこそすべての墓記壙志が書かれた時間の先後にしたがって排列されるという体例に合致する。閩本には、字は存在しているものの版木があいまいになっている場所があるが、浙本では空欠になっている。このような場合がかなりあり、字がはっきりしなくなった後で空欠になったということは明らかである。閩本の誤字が浙本では誤っていないという場合も少なくない。以上の例を、浙本が本来誤っていなかった箇所を閩本が後になって誤ったと解釈するのはむずかしかろう。

さらに閩本が浙本の誤りを訂正した例を見てみよう。閩本巻五十五「答康戸曹」の題注に「仲穎、ある本には仲字がない。」とあり、「答邵叔義」の題注に「ある本には叔義の二字がなく、機字がある」とあり、浙本はまさにそうなっている。類似の例は巻末の『考異』にもっとも多い。『考異』が記録している別本のバリアントのかなりの部分は浙本とまったく同じである。浙本は閩本とくらべると、書簡の中でも問答の質問の部分において内容に大きな出入りがあるが、ほとんど閩本の『考異』に記録されている。編集の順序についても、閩本にも浙本に比べて合理的な部分が存在する。たとえば「濂溪先生事実記」「伊川先生年譜」を浙本はそれぞれ巻七十八の記類、巻七十一の雑著類に置いているが、これは不適当で、閩本が巻九十八の伝状類に入れているのが合理的である。文字についても浙本に数多く見られる空欠が閩本では字が入っており、先に字があって後に空欠になったというのは明らかに不可能である。その他浙本の誤字を訂正する場合もかなり少なくない。さらに重要な例は巻六十七の「仁説」という文章で、閩本の題注は「浙本は誤って南軒先生の「仁説」を先生の「仁説」と考え、先生の「仁説」を「序仁説」としている。そしてこの篇は「仁説序」ではないかと疑われるので、暫時うしろにくっつけておく、と十文字の注（此篇疑是仁説序姑付此）がついているが、今すべて除去して訂正する。」といっている。これこそ閩本が浙本よりも後に出たことの鉄壁の証拠である。

このように互いに矛盾した状況について比較的合理的な解釈を下すとすれば、次のようになるだろう。今見る閩浙二本はかつてたがいに行った修訂をうけつぎ、どちらもすでに初刻本ではなくなっており、二本がどちらが先、どちらが後かという最初の状況を反映しようがないのである。この点についてたくさんの証拠をあげることができる。たとえば閩浙二本に付載されている『考異』の大部分はまったく同じであるのに、しかも二本とも異なっており、この二本以外に同時代に別の本が出回っていたことを示している。『郡斎読書志付志』に著録さ

れている「王野百巻本」にはもともと黄荘猷の跋がついていたのだが、今は失われており、この本の原刻本はすでに伝わっていなかったことがわかる。浙本巻五「水調歌頭聯句問訊羅漢」の注に次のようにいっている、「この作品は楽府のところに置かれるべきだが、旧編に従ってここに付加しておく。」また閩本巻五の「雪梅二関奉懐敬夫」の注にも「この二関は楽府のところに置かれるべきだが、後の詩が存在しているので、旧編に従ってここに付加しておく。」とあり、この「旧編」がすなわち別本である。宋の閩本の『別集』巻七「十月上休日游臥龍玉淵三峽」詩の題注に「大全集を見ると秋字韻はあってもこの鴎字韻はのせていない、馮本にはある」といっている。ここでいっている「馮本」はまだどの書目にも収録されたことがない、等々である。以上の別本、旧編、馮本、黄氏跋本は、現存する閩浙二本の祖先かもしれないし、二本に別れる過程で刊刻されたのかもしれないが、今では判断しにくい。明嘉靖十一年に潘潢が書いた「文公集跋」に、「ただ残念なのは慶元年間公の晩年に、異学の禁がちょうどきびしい時期にあたり、片言隻句といえども廃棄された、云々。淳祐以来少しずつ落穂拾いをしたが、すでに公の末子朱在が初めて分類編纂した版本の面影はない」とあり、このような言明は事実に符合しているのである。現存する諸本は初刻本でなく、『正集』には考証の材料となる宋人の序跋がないため、閩本浙本が互いに継承発展してきた過程の詳細はなかなかわからない。我々の推定によると、朱在は朱熹の末子であって、侍郎にまで昇進し、朱熹の遺命を受けて遺文を収拾した。彼が編集した本は論理的には閩浙二本のおおもとになったはずである（朱在の版本がすでに百巻だったかもしれないし、百巻には欠けており後に増補されたかもしれない）。その後閩浙の両地で編集翻刻され、おたがいを資料として訂補された結果、現存する二本となったのである。閩本がそのおおもとであったので後に主流となったのも無理はないと思う。

現存する宋の閩浙の二本はどちらも残欠本であり、全部で二十種あまりである。我々が目にしたのはどれ

も閩浙二大系統の版を同じくする重刊本であり、それらを以下に概述しよう。

閩本系統

『晦庵先生朱文公集』百巻目録二巻、北京大学図書館李□四七二五、宋代の閩刊本。半頁十行で一行十八字、双欄、双魚尾、上には字数を記し、下には頁と刊刻工の名を記し、白口と黒口が併存しており、明代以後の版木補修と手書で補ったところがある。もともと李盛鐸の旧蔵本で、「謙牧堂蔵書記」の印章が押してあり、巻一から巻九十四まで残存している。全体の保存状態はかなりよく、補修の箇所は多くない。

もう一種類、『続集』十一巻、『別集』十巻が付いており、北京図書館蔵〇一〇四四、宋代の刻本で元代補修本であり、宋の皇帝の諱は「擴」まで諱んでいる。『正集』は四十九巻残っており、『続集』は巻一から巻四まで、『別集』は巻六から巻十まで残存している。最後に景定四年余師魯の跋がついている。刊刻工の姓名、行款をしらべ、そして十九巻を抽出し対校した結果、李本と同じ版であるとわかった。

もう一種類、北京図書館〇一〇四〇、宋代に刻され宋元明に補修された。『正集』は七十三巻が残存し、『続集』は完全、『別集』は巻一から巻五までが残存している。刊刻工の姓名と行款をしらべ、三十巻を抽出対校した結果、李本と同じ版であるとわかった。

もう一種類、北京図書館〇一〇四一、宋代に刻され元に補修された版本で、全部で四十八巻残存している。刊刻工の姓名、行款をしらべ、十二巻を抽出対校した結果、李本と同じ版であるとわかった。

もう一種類、北京図書館〇一五九七、宋代に刻され、元代明代に補修された。『正集』は四十八巻が残存し、『別集』は第六巻から第十巻まで残存している。刊刻工の姓名、行款をしらべ、八巻を抽出対校した結果、李本と同じ版であるとわかった。

もう一種類、北京図書館〇一五九八、宋代に刻され、元代明代に補修された。五十二巻が残存している。刊刻工の姓名、行款をしらべ、十二巻を抽出対校した結果、李本と同じ版であるとわかった。

もう一種類、四川師範大学図書館の八四五・二三／二五四〇、宋代に刻され、宋元明代に補修され、「呉興劉氏嘉業堂蔵書記」の印が押されていて、四十七巻が残存しており、もう一種類の宋代浙刻本の残本とあわせて一つの書物として保存されている。刊刻工の姓名、行款をしらべ、何巻かを抽出対校した結果、李本と同じ版であるとわかった。

『晦庵先生朱文公続集』十一巻、『別集』十巻、北京大学□四五三、宋代の刊本で明に補修されたもので、手書きで補ったところや欠頁がある。半頁十行、一行十八字、白口と黒口が併存している。以上各本付録の『続集』、『別集』とじっくり校勘すると内容・文字にそれほど大きな差異があるわけではないが、刊刻工の姓名はかなり異なり、別の版木によるものであろう。

浙本系統

『晦庵先生文集』百巻目録二巻。北京図書館三三二九、宋寧宗の時に浙江で刻され、元代明代に補修され、宋代の皇帝の名前は「擴」まで諱んでいる。半頁十行、一行十九字、白口で双欄、上の魚尾だけがあり、下には頁と刊刻工の姓名が記され、手書きで補ったところがある。本書はもともと瞿鏞が持っていたが、後に北京図書館に寄贈された。「紹基瞿鏞」「瞿潤印」「鉄琴銅剣楼」「李荘仲図書記」「海虞朝棟荘仲宝蔵」「雲山一葉閣李氏蔵書」などの印章が押されている。篇目の順序と内容の詳略の点で、『四部叢刊』が影印した明嘉靖本とかなり大きな違いがある。巻六十七では誤って張栻の「仁説」を集録しているし、全体的に缺字がかなり多い。

もう一種類、北京図書館七六八九、宋代に刻され元明に補修され、かなりいたんだ箇所が多い。巻一は清代に

宋代の抄本を写したもので、朱筆で圏点がほどこされている。「子穎」「陳鋭」「揚州方氏退園蔵書印」「涵芬楼蔵」「海塩張元済経収」などの印章が押されている。刊刻工の姓名・行款を調べ、巻一、巻二、巻六十七、巻百を抜き出して対校したところ瞿本と同じ版であることがわかった。

もう一種類、北京図書館のマイクロフィルム巻一八〇／一一五：一一七号は、アメリカの国会図書館が寄贈したもので、宋に刻され、元に補修され、明初に印刷された。胡蝶装で、六十五巻が残存している。書の末尾に「至元二年十二月江浙等の儒学提挙余謙が重ねて補修した」とある。巻首ごとに民国十三年譚新嘉、李文椅、爨汝僖ら三人の鑑定記録がついている。刊刻工の姓名、行款を対照し、十六巻を抜き出して対校したところ、瞿本と同じ版であることがわかった。

もう一種類、北京図書館のマイクロフィルム巻一三六一／五七六：五七九号、アメリカ国会図書館の寄贈したもので、宋に刊刻され、元に印刷された。胡蝶装で、五十五巻残存している。巻首ごとに民国十三年の譚新嘉ら三人の鑑定記録がついている。刊刻工の姓名と、行款を対照し、十巻あまりを抽出対校した結果、瞿本と同じ版であることがわかった。

もう一種類、北京図書館〇一〇三九、宋代の刊本で、胡蝶装、補修された箇所があり、四十八巻が残存している。巻首巻末ごとに赤い陽刻で「国子監崇文閣官書借読者必須愛護損壊缺失典掌者不許収受」という印章が押してあり、またモンゴル語の官印もある。刊刻工の姓名、行款を対照し、十九巻を抜き出して対校したところ、瞿本と同じ版であることがわかった。

もう一種類、北京図書館〇一〇四二、宋代に刻されて元代に補修され、胡蝶装で七十五巻が残存している。封面の背後には民国の譚新嘉らの鑑定記録があり、最後の部分には元の余謙が補修したという題識がついている。

刊刻工の姓名、行款を対照し、二十四巻を抜き出して対校したところ、瞿本と同じ版であることがわかった。

もう一種類、四川師範大学図書館八四五・二三／二五四〇、宋代に刻され、元代明代に補修され、「呉興劉氏嘉業堂蔵書記」「寒雲秘笈珍蔵之印」などの印章がおしてあり、三十六巻が残存している。先に述べた同じ図書館の宋代閩刻の残本と合わせて一つの書物として保存されている。刊刻工の姓名、行款を対照し、何巻か抜き出して対校したところ、瞿本と同じ版であることがわかった。

種々の事情により、残念ながら現存する宋残本『朱熹文集』のすべてを見ることはできなかった。しかし以上の記述からわかるように、現存する二十種あまりの宋残本はみな閩浙二本に帰属し、大多数はおそらく同じ版の復刻本である。各本の残欠・補修・寄せ集めの情況がそれぞれに異なるので、一つ一つを比較校勘すれば、完全な閩浙二本を手に入れる可能性もある。

第四章　『続集』と『別集』

閩浙二本は両方とも百巻で、『正集』である。淳祐五年、王遂が『続集』十巻を刊行した。その年に書かれた序文によると、収集した佚文は主に蔡元定の孫蔡模や劉文昌などから来たもので、多くは朱熹晩年の手紙である。趙希弁『郡斎読書志付志』は『続集』十巻を著録し、「王遂が刊行して序文を書いた」と述べている。黄鏞「文公別集序」もまた「文公先生の文集、『正集』『続集』は潜斎・実斎の二人が書院で版刻した。」と言っている。実斎とは王遂で、『宋元学案』の巻七十一に見える。『続集』はふつう『正集』にくっついて刊行されているが、単行本としては宋代に刊行され、明代に補修された本が残っており、『別集』と同じ版で、『晦庵先生朱文公続集』十一巻、『別集』十巻と題され、北京図書館に所蔵されている。元刻本は一種類で、『晦庵先生朱文公続集』と題

され、浙江の天一閣、日本の九州大学に所蔵されている。

淳祐十年、徐幾が劉允迪の孫劉観光のところから朱熹が劉允迪に与えた書簡数十枚を手に入れ、一巻を増補し、この時から『続集』はついに十一巻となった。最後の一巻が刊行されたいきさつは、淳祐十年二月の徐幾の跋に書かれている。

景定四年、余師魯は再び収集した佚文で『別集』十巻をつくり、黄鏞の手によって咸淳元年に完成された。刊行の詳しい事情は余師魯の跋、黄鏞の序に見える。『別集』は体例がややきびしく立てられていて、各篇の下には出処がはっきり書かれている。佚文の供給源から見ると、単独に刊行されていながら『正集』、『続集』二集に入っていなかったり、他の書物に収められていたり、個人が所蔵していたりといったものを含んでいる。すでに刊行されていたものには『大同集』、『南康集』、『臨江集』、『臨漳語録』、蔡九軒刊の『慶元書帖』、朱熹の曾孫朱濬刊の『家蔵帖』、洪正学刊の『允夫家蔵帖』、汪逢龍刊の『允夫家蔵帖』、胡翼龍刊の『静春家蔵帖』、廖徳明刊の『韶州州学帖』、『婺州帖』などがある。他の書物に収められているものには『稽古録』、『南渓祠志』、『寒山子集』、『尤川志』などがある。『別集』の単行本もそれほど多くはなく、宋に刊刻され明に補修された本が一種あるだけで、北京大学図書館に所蔵されている。明初の刊本としては『晦庵先生朱子大全別集』十巻があり、北京大学、浙江省図書館に所蔵されている。

『続集』と『別集』の変化の流れはわりと単純で、清の初めに『続集』五巻と『別集』七巻が出現しただけである。たとえば康熙巻本、『四庫全書』本などである。しかし内容を比較校勘したところ、差異はとても小さく、徐幾が補った一巻が収録されていないことを除いては、主に巻の区切り方と作品の配列がちがっているだけである。『続集』と『別集』の来源はかなり雑で、系統だった整理を経ておらず、同じ文章が二度収められていたり、

文字の脱落やまちがいがかなり多い。しかしこの二集はかなり集中的に佚文を収集しているため、『正集』と併行して世に行われ、ともに朱熹の詩文集全体を構成している。

第五章　宋代の上記以外の朱熹文集

『宋史』芸文志は『朱子前集』四十巻、『後集』九十一巻、『続集』十巻、『別集』二十四巻、合計百六十五巻を著録しているが、今はなくなっている。この本と吾々が知っているテキストの巻数はたいへんちがっており、その編集刊刻の情況は知る由もない。明の程敏政『篁墩文集』巻三十六「題文公梅花賦」に「文公には前、後、続、別の四集があり、世に流布していたが、後集はなくなってしまった。この賦は『事文類聚』に入っているが、もともと『後集』の収録作品の一つであった」とある。『新安月潭朱子族譜』が収録している朱熹の「茶院朱氏世譜」は、茶院十二世の後裔朱冲の序文を載せている。「右の「茶院朱氏世譜」には刊本があり、『大全後集』の十一巻に入っている。」「梅花賦」「茶院朱氏世譜」はともに現行の朱熹の文集には入っていない。『宋志』が著録している百六十五巻本はかなり周到に朱熹の詩文を収録しており、おそらく宋末に朱熹の文集の再度の結集が行われたのであろう。

第六章　元以後の全集刊行

以上が宋代の朱熹文集の編集刊刻の概況である。要約すると、宋本の『朱熹文集』で現存しているのは淳熙本・宋閩刻本の残本・宋浙刻本のただ三種のみである。（他に宋代刊刻元代明代補修の『続集』『別集』の単行本一種がある。）

元代以後、朱熹の文集は大規模に刊行され、各種の版本が出現した。書名には『晦庵先生文集』、『晦庵先生朱文公文集』、『朱子大全』、『朱子集』、『晦庵集』、『考亭正集』など二十数種があり、巻数には十八巻、六十六巻、八十八巻、百巻、百四巻、百十巻、百十二巻、百二十一巻など十数種類がある。これらを収蔵する公的機関・個人は全国各地、日本、朝鮮、アメリカに及んでいる。『文集』流伝の全貌を見ていこうとする時、全集の伝刻が本流で、流伝の過程での版本の整理研究やアンソロジーの刊行は支流である。まず本流の方から見ていこう。

元代には全集を刊行した人はいなかった。北京大学図書館、遼寧省図書館には『晦庵先生朱文公文集』（一名『朱子全集』）の残本が三種類所蔵されており、それぞれ「元刊本」「元刻明修本」「元閩刻本」と題されているが、比較してみたところ、実は明代の天順四年の刊本であった。

明代に入ると、全集の刊刻がはじめて盛んになった。いま台湾の故宮博物院には『文公先生朱子大全文集』残本一種が所蔵されており、二十三巻が残っている。他に『続集』十一巻があって、「明洪武間刊本」と題されている。まだ見ていないので詳細はわからないが、著録にまちがいなければ、世界に現存する最も早い明刊本であるはずである。

現存するかなり早い時期の明刊本全集は天順四年の賀沈・胡緝が刊刻した本である。当該の本は、あるものは『晦庵先生朱文公全集』百巻、『続集』十巻、『別集』十巻と題されているし、あるものは『朱子大全』百巻と題され、『続集』、『別集』はない。比較したところ、『正集』の部分が同じ版であることはまちがいない。『続集』は十巻だけで、淳祐十年の徐幾が編集した一巻は収められていない。天順本は閩本の系統に属し、配列の順序は『四部叢刊』本と同じで、あちこちに所蔵されている。

ある研究者は、現存する成化十九年の黄仲昭の跋によって、成化年間に朱熹全集が刊行されたと考えている。

しかしこれまで成化本が著録されたのを見たことがない。そして黄仲昭の跋を細かく見ると、次のようにいっている、「長い時間を隔てているため、版木がすりへったり欠けたりするところが多くなってきて、読者は困っていた。成化戊子、仲昭は翰林から南都に左遷され、偶然閩本を手にいれ、公務のあいまに浙本と校勘した、云々。丙申の年、閩憲使山陰の唐公質夫、僉憲蘭渓の章公徳懋が旧版が日に日にすりへっていくのをあわれみ、ついに私の校本を使って補修した。刊刻の仕事がおわらないうちにお二人はあいついで職を去り、また残欠してしまった。僉憲天台の林公一中がやってこられ、その有様を悲しんで（補修を）自分の任務と考えたのだが、長らく時間的余裕がなかった。壬寅の秋、先生九世の孫都転運伯承君と相談し、また私の校本でしっかり修訂を加え、まちがいは正し、腐蝕したものはとりかえ、欠けたものは補い、ここまできてはじめて心残りがなくなった、云々。後世の人々に申し上げたい、この版をよく保護して補修してほしい。」成化年間には版を補修しただけらしく、刊行しなかったのはあきらかである。近年何人かの学者が日本で成化十九年刊刻本を見たといっているが、なお疑問点が存在する。①なぜこの本は日本では二箇所において所蔵されているのに、中国国内ではまったく所蔵も著録もされていないのだろうか。②この本が成化本であると断定する唯一の根拠が黄仲昭の跋であるというのは、あまりに希薄ではないか。③この本が載せている黄氏の跋は残欠しており、末尾の百五十五字が欠けているにもかかわらず、「この版を保護して補修してほしい」などの重要な字句が残っているのは、なぜかわからない。まだ目にしていないので疑問として残しておく。

また日本の尊経閣文庫、足利学校遺跡図書館、金比羅宮に『晦庵先生朱文公文集』百巻『続集』十一巻、『別集』十巻が所蔵されていて、「明正徳刊本」と題されている。この本は明清以来、国内では著録されておらず、かなり疑わしい。見た人によれば著録の誤りとのことである。「正徳」というのは日本の中御門天皇の年号で、

明の武宗の年号ではない。

嘉靖まで降り、張大輪・胡岳の手によって『晦庵先生朱文公文集』百巻、『続集』十一巻、『別集』十巻が刊行された。蘇信の序と潘潢の跋があって刊刻の事情が詳しく書かれている。この本は閩本を底本とし、浙本のいいところを採用しており、校勘はかなり詳細で、刊刻はすばらしく（『正集』が最もすぐれる）、原文の欠けているところは慎重に改正補修され、時に考訂も行われるなど、明以来最も影響力をもった通行本となった。所蔵されている本は種類が豊富で、日本の中御門天皇の正徳元年に寿文堂が翻刻したし、清の道光三十年、陝西省関中書院がこの版によって再び刊行し、同治十二年六安の涂氏求我斎が倣刻本を作り、『洪氏唐石経館叢書』に収録した。その後、『四部叢刊』、『四部備要』がこの版によって影印排印した。

明末になると、万暦三十三年、朱吾弼が再編集し、呉養春、朱崇沐が刊刻した『晦庵先生朱文公文集』八十八巻、『続集』十一巻、『別集』十巻が現われた。この本は閩本の系統で、はっきりしたちがいは作品の排列に手が加えられた点である。しかし再編集とはいっても、『正集』の奏議類を抜き出して、『重鍥文公先生奏議』十五巻として単独で刊行したこと、もともと第二十四巻に編入されていた書簡が巻十一から始まることを除けば、たいした違いはない。この本は欠字を補った箇処がかなり多いが、大多数はいいかげんなもので、版本上の根拠はない。この刻本はいろんなところで所蔵されており、崇禎七年にも李寅賓の補修本がある。

北京図書館には他に明の抄本『晦庵先生朱文公文集』百巻の残本一種類があるが、年代は不詳である。閩本の系統に属する。

清代の最も早い全集の刊刻は康熙元年福建采芝堂刊の『朱子大全集』百十二巻（『続集』五巻、『別集』七巻を含む）である。この本には『朱子年譜』がついている。現存しているのは残本一種類で、書簡による問答二巻を

欠いている。影響力がかなり大きいのは康熙二十七年の蔡方炳、臧眉錫が刊行した『晦庵先生朱文公文集』百巻、『続集』五巻、『別集』七巻である。この本の特徴は『続集』『別集』の編集・配列・巻数に相違があることである。清代の朱玉はこのテキストが元代に刊刻された祠堂本にもとづくと言い、朱振鐸は「淳祐己酉刊の『続集』五巻、これを編集した人の姓名はわからない。景定年間に建通の太守余公師魯が『別集』七巻を補った」とさえ言っているが、何を根拠にそう言っているのかわからない。しかしその内容を考察すると、五巻とか七巻とか言っているのは、巻数の立て方が違っているだけで、篇目は十一巻、十巻本とそれほどかわりはない。この康熙刊本は欠字を補っている部分が多いが、多くは憶測によるものだ。乾隆年間に『四庫全書』を作った時には康熙本を底本とした。同時期に建陽書院重刊本がある。康熙本は光緒年間に入ると相前後して刊刻され、『西京清麓叢書』、『劉氏伝経堂叢書』に収まった。

康熙五十二年、李光地らは勅命を受けて『朱子全書』六十六巻を編纂した。この本は、全集を再編分類したもので、門類は完全に『朱子語類』をまねている。しかし朱熹の語録が混入しているため、実際には文集とは言えない代物である。康熙の原刊本以外にも、『四庫全書』本、同治八年成都書局本、江西書局本、光緒九年古香斎刊本など何種類かの抄本、刊本がある。

雍正八年、朱熹十六世の子孫朱玉が、『正集』、『続集』、『別集』のすべてを分類再編して、『朱子文集大全類編』百十一巻とし、その類別や配列は通行本とは異なっている。また朱熹の佚文を網羅して『補遺』を作ったが、考訂が精密でなく、誤って偽作を収録してしまっている。この本は原刻本のほか、乾隆十五年、道光二十年の二度にわたって刊刻された。

また紹介論文によると、李氏朝鮮英祖辛卯の年（清乾隆三十六年）、全羅道観察使尹東升が勅命によって『朱

子大全』百巻、『続集』十一巻、『別集』十巻、そして『遺集』二巻、『付録』十二巻を刊行した。現在日本に影印本を所蔵しているところがあるという。

咸豊十年、徐樹銘が福建の建陽紫霞洲祠堂で『朱子集』百四巻を刊刻した。この本はいわゆる「建安朱氏の嫡流が所蔵している」祠堂本によったもので、『年譜』と『補遺』が付されている。同治元年の印本が数多くある。

以上が元代以来の朱熹文集流伝の大勢である。要約すると、歴代の刊刻はみな宋代の閩本を祖述し、さらに浙本の長所を採用しており、実際は二本が合流したものになっている。その中で最も通行したのは『正集』百巻、『続集』十一巻、『別集』十巻本という編成で、『正集』だけの単行本はだんだん普及しなくなった。『正集』百巻、『続集』五巻、『別集』七巻のテキストは、『四庫全書』に入ったためにやはり通行本となった。以下支流の方を見てみよう。

第七章　版本の整理と研究

校勘について。一般的にいって『文集』が刊行されるたびに、精粗の差はあるものの全体的な校勘作業が行われているはずである。宋代の閩浙二本に付してある『考異』は、現存する最も早い『文集』の校勘記である。このほか、『文集』の中にバラバラに宋代の人々の校勘記録が残っている。明代成化年間、黄仲昭が閩浙二本を対校した仕事は、重要な意味をもっていた。この校勘作業は閩浙二本合流の先駆となった。嘉靖年間、張大倫、胡岳らの刊刻では、黄仲昭の校勘作業の基礎に立って、さらに細かく行き届いた校勘を行った。文字のまちがいに対して直接校正を行っているだけでなく、注釈で説明を加えている箇所も少なくない。この版本は康熙年間に日本で翻刻され、その天頭（欄外の空白部分）には少なからず校勘記録があり、ある程度の参考価値がある。明

末清初には、柳希春が校勘刊行した朝鮮刊刻本が存在し、現在日本に所蔵されているが、残念なことに未見である。康熙二十七年臧眉錫・蔡方炳の刊本に於いては、蔡泰嘉らが校勘を行っており、中山大学蔵本には無名氏の朱墨による校勘記がある。宋代の閩浙二本には数多くの欠字があって、明代の天順本・万暦本、清代の康熙本・雍正本・咸豊本ではかなりの部分を補っており、それぞれ採用すべきところがある。清代で最も重要な校勘の成果には二つある。一つは王懋竑の『朱文公文集校釈』七巻と『続』一巻である。王氏は清代の朱子学の泰斗であり、校勘注釈の水準はおそらく右に出るものとてなかろう。もう一つは賀瑞麟の『朱子文集正訛』一巻、『記疑』一巻、『正訛記疑補遺』一巻である。賀氏が参照した書物は全部で五十数種類で、非常に勤勉に作業を進めている。「まぐれあたり」のところもあるが、独創的な業績も少なくない。『正訛』、『記疑』は歴代諸家の業績を取り入れ、ある程度総括的な性格を持っており、その参考価値はかなり大きい。

補遺について。宋代に編纂された『続集』、『別集』二集は、すでに『文集』補遺の先駆となっている。明の人朱培が『文公大全集補遺』八巻を作り、かなり豊富な内容であったといえる。しかし、中には少なからぬ疑わしい作品、偽作が存在する。清代に刊行された『文集』に付された『補遺』が二種類ある。一つは雍正年間朱玉が刊行した『朱子文集大全類編』付録のもの、一つは咸豊年間徐樹銘が刊行した『朱子集』付録のものである。単行本としては朱啓昆『朱子大全集補遺』二巻と陳敬璋『朱子文集補遺』五巻がある。以上の書物が収録している詩文には互いに重複がある。『全宋文』、『全宋詩』は空前の大規模な調査を行い、集められた朱熹の佚詩佚文はかなりな量である。

その他の整理の仕事には、改編（たとえば万暦本、雍正本及び『朱子全集』など）、断句（たとえば日本の浅見安正が点を切った嘉靖本—これは岡田武彦が、「訓読はきわめて正確」と言っている、『四部備要』活字本、そ

して『叢書集成』本など)、そして考訂がある。

第八章　選集の刊行

このジャンルは朱熹詩選、文選及び詩文合刻を含むが、そこに選ばれた詩文は全集の範囲を超えることはない。

現存する最も早い朱熹の選集は、北京図書館所蔵元刊本『晦庵先生朱文公詩集』で、今十二巻が残っている。明代でかなり大きな影響力を持ったのは、正徳十六年新安の程璩編刻した『晦庵先生朱文公詩集』十二巻と、呉訥が選んだ『晦庵先生五言詩抄』一巻があり、そのほか万暦三十一年鄭雲竹が刊行した『新刻紫陽五言詩選』前後集二巻、付載の七言詩十四首がある。清に入ると、あい前後して朱熹詩選十種類が刊刻された。その中で比較的重要なものには康熙内府精抄本『朱子詩集』十巻及び付載の『考異』、杜庭珠選『朱子詩抄』四巻、道光二十七年徐啓山校刊『朱文公詩集』十巻などがある。康熙六十一年洪力行鈔釈本『朱子可聞詩集』五巻の影響がかなり大きく、『朱文公詩賦全集』十巻及び付載『補遺』一巻、『訓蒙詩』一巻は、朱玉の『朱子文集大全類編』から抜き出して単独で刊行したものである。乾隆年間には朝鮮正祖朝に編輯された『雅誦』八巻が刊行された。このほかに『宋元名家詞』の中に『晦庵詞』一巻が入っている。

最も早い朱熹の文選は、朱熹の弟子滕珙が編集した『類編標注文公先生経済文衡前集』二十五巻、『後集』二十五巻、『続集』二十二巻である。この本は元の泰定元年に梅渓書院から刊刻され、明の万暦三十四年に朱吾弼、朱崇沐らによって重刊された。明代で影響がもっとも大きかったのは呉訥の『晦庵文鈔』と唐順之の『唐荊川選輯朱文公全集』である。『文鈔』は全部で七巻、成化十八年周鳳らによって刊刻された。嘉靖十九年、張光祖は崔銑が選んだ『続集』四巻と合わせて十巻とし、刊行した。二十一年にもう一度重刊した。『全集』は全部で十

五巻、荊川が古文の総帥の地位にあったため、広く普及し、明清の学者たちからたびたび引用された。以上の二種類以外にも、万暦三十二年、朱崇沐が刊刻した『重鑅文公先生奏議』十五巻、汲古閣刊『晦庵題跋』三巻、及び王宗沐編の『朱子大全私鈔』十二巻がある。

清代の人々はいよいよさかんに朱熹の選集を出版し、世に出たものが十数種類もある。比較的早いものに康熙四十四年呉震方が編んだ『朱子論定文抄』二十巻、付載『補編』一巻、康熙五十一年杜庭珠が選評した『朱子文抄』二十巻がある。康熙四十七年刊の『朱子文集』十八巻と、康熙五十六年刊の周大璋が選んだ『朱子古文読本』六巻は大きな影響力を持ち、前者は同治年間に重刻され、『叢書集成』初編に収録された。後者は道光二十八年に重刊された。やや後になって、雍正十三年には李紱が選んだ『朱子晩年全論』八巻が刊行された。道光・咸豊年間には王宝仁の『朱子文鈔』、杜宗岳『朱子古文節選』二巻、朱澤澐『朱子分類文選』が世に出た。その中で朱澤澐の本が比較的普及し、道光・咸豊年間の刊刻本、抄本がある。朝鮮で刊刻されたものには、李滉が編次した『朱子書節要』二十巻、正祖十八年に編まれた『朱書百選』六巻、そして『朱文鈔選』四巻など数種類がある。清末にも『館選朱子古文読本』二巻などがある。民国時代にも相前後して『朱文公書牘』四巻の活字本、『彙呈朱子論治本名疏』などが刊行された。

また朱熹が官吏として赴任した場所によって編集した『南康集』、『臨江集』などの詩文集もある。現存する宋代の陳利用が編集し、明の林希元が増補した『朱文公大同集』十巻は、大きな価値を持つ。この本は元刊本、明刻本二種が残っており、前者には元代の都璋が著わした『年譜』が付載されている。この本は現行の『文集』の字句のまちがいを訂正することができるし、いくつかの朱熹の詩文が作られた時・地点を考訂することもできるし、佚文を集めていることもある。宋以来、朱熹の詩文を単独で刊刻することもかなり流行した。『感興詩』、

『武夷櫂歌』、『易五賛』、『記外大父祝公遺事』、『宋山陵議状』、『朱子訓子帖』、『訓学斎規』、『敬斎箴』、『白鹿書院教規』及び『増損呂氏郷約』、『孝経刊誤』、『雑学弁』などが相前後して刊行された。この中で『感興詩』『武夷櫂歌』などは数十種類の版本があり、広く読まれた。そのほか清人朱澤澐には『朱子文集選目録』九巻があるが、このような選目の形式はあまり見られない。

詩文の選刊というものはふつうは紙幅が小さく、その多くは代表的な著作なので、ハイレベルの研究整理が行われることが多い。『感興詩』には宋人蔡模、王栢、元人の胡炳文、民国尊経堂など多くの人々の注釈がつけられているし、『武夷櫂歌』には宋の陳普の注釈がついているし、『経済文衡』には宋の滕洪の標注がついているし、『可聞詩』には洪力行の注釈がついているし、『朱子文抄』には杜庭珠の評語がついているし、『朱子古文節選』には杜宗岳の評語がついているし、『晦庵文鈔』には王振声の校語と跋がついている。これらの仕事はすべてある程度『朱熹文集』の普及を促進したのであった。

後記　本論は沈錦燦先生の多大な援助を得て書かれた。謹んで感謝の意を表わしたい。

訳者後記　本論は一九九六年四川教育出版社刊『朱熹文集』付載「朱熹版本考略」を翻訳したものである。原文には章立てはなく、ひとつづきになっているが、読みやすくするために訳者が章立てをし、見出しを加えた。